

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻	修士課程	修了年度	2024 年度
氏名	中山 愛理		指導教員 (主査)	諏訪 絵里子准教授

論文題目	大学生における ASD 特性がメンタライゼーションと被害念慮を介して 修学上の困難に与える影響
------	--

本文概要
【問題と目的】 我が国の大学 4 年生の卒業率は 90%以上だが、発達障害の学生では 70%未満とかなり低い割合になっている（日本学生支援機構，2021）。中でも，自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder：以下 ASD とする）の学生の割合が最も多く（日本学生支援機構，2021），ASD 学生の修学上の困難に対する支援が急務であると考えられる。大学修学には，自分でリソースを活用するスキルや対人関係構築のスキルが必要となり（高橋，2012），ASD 学生にとっては困難な学習環境であるともいえる。また，ASD 特性のある学生は，大学でのストレスから心理的な二次障害につながりやすく，修学に従事できず，不登校や退学を引き起こしやすいとされる（十一，2016）。ところで，ASD 特性がある者は被害念慮が高くなることが示唆されている（村上他，2022）。被害念慮の高い学生は，被害念慮によって修学に支障が出たと訴えたことが報告されている（Harper & Timmons，2019）。つまり，被害念慮の高さは修学上の困難を引き起こす可能性があり，ASD 特性のある学生が被害念慮をもっていると，より修学上の困難を抱えやすくなると考えられる。さて，ASD 者の被害念慮は，ASD 特性によって孤立やいじめ被害への遭遇しやすさからくる二次的な問題とも考えられている（杉山，2008）。ASD 者の被害念慮は，ASD によってメンタライゼーションの機能が低くなることとの関連が示されている（Bliksted et al., 2016）。メンタライゼーションとは，自分や他者の行為を欲求や感情などに基づくものとして解釈する精神過程であり，心の理論やメタ認知などを基礎に他者との関わりや情動体験，省察を通して後天的に形成される力である（Midgley et al., 2017）。本研究では，大学生における ASD 特性がメンタライゼーションの低さと被害念慮を介して，修学上の困難に与える影響を明らかにする。それによって，ASD 特性のある大学生が抱える修学上の困難の予防や，支援の一助とすることを目的とする。 【方法】 大学生 202 名（男性 73 名，女性 124 名，その他 5 名）を対象に質問紙調査を実施した。調査材料は，フェイスシート（学年，性別），修学上の困難に関する質問（出席率，課題提出，グループワークへの参加，単位取得状況，単位取得の困難さ），自閉症スペクトラム指数（AQ）日本語版（若林他，2004），The Reflective Functioning Questionnaire（RFQ-8）（Fonagy et al., 2016），対人関係における境界例心性尺度（田村・井上，2005），日本語版 Paranoia Checklist（山内他，2007）であった。 【結果と考察】 ASD 特性があると，課題提出状況が悪くなり，グループワークへ積極的に参加しなくなることで，単位取得を困難だと感じやすくなることが明らかとなった。一方で，ASD 特性があっても出席状況や単位取得状況が悪くなるとはいえなかった。また，ASD 特性があると，メンタライゼーションに失敗しやすく，自分と他者の行為の意図を適切に理解することに困難があることが示された。さらに，被害念慮があっても，修学上の困難を抱えるとはいえなかった。そして，ASD 特性があるからといって被害念慮が高くなるとはいえないことが明らかとなった。しかし，メンタライゼーションの機能不全があると被害念慮をもちやすくなることが示唆された。本研究では，被害念慮が修学を困難にするわけではないことが明らかとなった。つまり，修学が困難な ASD 特性のある学生には，まず合理的配慮を行うことが必要になると考えられる。さらに，ASD 特性のある者のメンタライゼーションは低くなりやすいが，適切なメンタライゼーションを学ぶ機会さえあれば，ASD 特性のある学生のコミュニケーションの問題を改善，予防できることも示唆された。したがって，ASD 特性のある学生の被害念慮を低減させるために，自分や他者の感情を省察する機会を提供することが有効ではないかと考え